通鑑
九
文和
京四清三上
三下
へ遠13
1.640
2

特 へ13 1640 2

本源

艶道通鑑巻之三

忘之情目録

一 高間の山乃段
二 佐保姫の段
三 松浦佐夜姫の段
四 文屋の娘乃段
五 錦木の段
六 葛城の大君の段
七 井手の下級乃段
八 行平中納言の段
九 大和国佐国乃段

来二

金松治

霊鶴

十 源の頼光乃段
十一 静女乃段
十二 源乃頼政の段
十三 化粧坂小将れ段
十四 妻こふ物の段
十五 想翅の鴛乃段
十六 小栗照姫れ段
十七 太田道灌の段
十八 更科弥七乃段
附漢の司馬相如か事
十九 瀬川采女か妻の段
二十 人目乃関れ段

一

高間の山乃峯れ白雲の。余所のみ見てやとくらし絶なんと
思ひを傳て云。人目の関守は胸の関苦と物思ひる
きはゞれるさきなからぬ。往さ還さの忍も路せて。松風の
翠簾に落くげしにも君が面ざしやらんと。雛の外妻にみえず。
我妻も今は物越の移り香ゆかしさ。かくわざ。又は飼の猫乃
首玉にみ縫して通わせ。蝶の羽にも寄せて。君が袂にこそとも
[illegible]に心を移す物ならぬ家も作らく。我ながら我魂を
ら探に一向此止探く袖に誓へど。又も南氣と根ぞ
[illegible]もされし。皆實の誠に恨みそ。夜な夜な枕に
乃雛をふくむらんとぞ。恋の最中とかいふ。伴てぞ世の強面

樵も漁りも人の卑しき情もしらず我に戀し人につらからん様ぞ。
をのれらに忠もなく物ありし事なく朋友の付合も家來に恵
もやらぬに所操するかわがれば君子の風をしぐ倚る物ぞ是を
後成御しよ人の心にならぬほどに志をもてる道にあらず。蘖ぬ一本に
若はかるし梯山に是よりて是紙無ざる心は何の業もまゝげぬ
との也浅山の志げゝと始めてぞ山かれ山の信をさりて又其のさまれ乃
人里へ出てこそ佛の教も神の掟も聖の識も人の世の伝はるも。
緯経の節目さだめて結なす事もあらじ聖紙といふと徳は。
しをかくされざるのみぞ佛は文解脱の徳にそかゞける也神は鏡
にそくはるゝなり。天地乃合して王化の所操すれんよ。何か

ろみはざる事有べきぞ。忠は縁にけつるの家第一なりけり
そるに其あらてなる徒
垂仁天皇天が下をしろしめす元年より御位に即まし事百
年。世豊に民治りて。大和國に都造りして住せ給ふ。御后は狭穂
姫と申して並ぶる此姿。殊に女のなす所業には紅工なしらべ。
たゞ右の侍人中節並は常の事にも其道にかなふて。げその徳
くれさるまゝに其徳化を帝も殊にめでさせ給ひ。朝政輔けさせ給
ひとされば。双方の御中睦しく。水も漏らざる御契深
けるに。后の兄狭穂彦は。謀る威勢にほこりて。いつしか帝を恨
そろ事有ければ。密に后を嬬ちらくおの紙とあるんびす紙

をめぐらし帝を殺しまいらせんと約束せしに。或時帝后の御膝を枕にて御
眠休有けるに。后よき折なりとて害しまいらせんと思ひけるが。折返して
兄の言をあらためれども日比よりの御情ありしほどに。かなしやと私語も
いかでか仇をなすべきぞやせんかくと思ひわづらひ給ふうちに御涙こぼれておちて
るを。帝の御顔へかゝりけるとかやうけまいらせバ。帝御夢さめて今の事よ。我
膝枕して休けるに。脇より小蛇来りて頸にまとひぬと見て。目を
覚しけれバ。何なるゆへぞと問せ給へバ。后は色に顕はれてそのまゝに
明しもせ給へバ。帝大に怒らせ給ひ。后をもあやしみ給ひ。海乃仏ひさ
はかりもかなはぬ事ぞ。おもいおもひけるも兄が謀叛是非に及
ばずとて早く誅伐せよと。軍卒をはなり。糠者が城を攻させ
らる。害は后めぐらすゆへ。我帝に忠貞あれども。兄を誅せらる科
のがれじとやおもひけん。糠者が城にうけ籠り。妻子も共に焼死なんとて
待ところに。后の身の上をくはしくて御契りも深かりし。后ふかく
糠者の子をあらためても。二人は出来たるほど。かけて帝に糠者
孫をかまへて。天皇の胎なりて。后を嫁させ給へんかとらし
耳打にて后も不審いかゞ御心の折をきかひて兄の心にまかす
ひ給ひしかども帝は余念なく膝枕の時にかなひ殺し
まいらせ候へども我にまかせよとのはからひに。初めては御
うせ率をかなし。帝のまゝをいさかひ参らせしかどもいよいよ帝
後ろへかゞりて帝の身を抑くてうらみん。剣をとりかくなるが。

蛇にかく甚に殺さんとし。又情をしらぬひとなれどもたゞみごと
ありがたく御命を救ひ給ふ。ひとたび過ハ有なれど。おもふ夜
ふたゝび帝もうらひさすべからず。されども兄の悪事によりめ
より仰しかどは貞の道いさぎよくして終もめでたからんと
かし此の妹みかくありて兄の罪に落入るは不便なり
一度仰せて許さる所なり。道にありて城に入て懐取なる
事。不貞ならず貞の道なり。不義ならずして義の婦道と
なづくべし。是まさに末の鏡なるべし

大伴の狭手彦ハ。文才武備和朝にゆるされし猛将なりしが。
蕃夷の役に召れて。高麗の国に軍立しけるに。本より軍旅

のなかひ命をうけしより家をわすれ妻子をわすれ。敵に向てその
所をはかるにあらず。されば生て二度和国にかへるべきともあらざりしを。
其妻のなげき歎きて高き山にのぼりて軍の船の遥に見ゆる方に烽
の煙にかくれて見てゐたりしに。その方を仰ぎて神に祈て貴房が招き。
立さけびしかども遂に彼国の宝玉石と此国より化しぬされしを
松浦佐夜姫といふ

誰より同じ常山の夙の執心凝て。石となれる虎とみえし矢の羽服と
なりしも。是いと全く至る忿慕の情なりけるはたとかなしけれん。
否さし金石と出る事も。知とるつまなれど
此陸の国に伝えし塩焼文正が事ハ。彼物語に正直の人をめ

さんくつの徳眞理をかけひつゆく家をてしたがへ者をつくることなく大きなる
も及ばず人の始をうたがひ思ふ。素行を好る。和歌の道より外なし。
歌の力ばかりなるものなり。情の広く深く人をあはれみ
ぶうるる事と嬉しかれば。親もうやまいてそだてうるうまれ出る
同も嫁をもとめいる。文正の所にとりての娘ばかりとそだて始いさこう
らん人など。豊後国のあるじなれば。ひとりとかもなほいとかしづき。
無いはしてぞの守れ下知をうしなひていぶかしかりける。毎もおこて
なりけんそれをうらいぶるに。ぶたいわで宿世の歌やちんどかれど
しかもとりてもらいどなほ行くあるうらしまし商人にうじ
きをおもう嫌も四くれよりぶきまいらうぐ泣ばし

うれしかれば文正ぶるいうの作と守れ国の守れ下知をゆずれ情
うらて始人よりいい付人も無るよ縁をもつ一生ゆをとる男也
いつまわらるものみそして行ふをんぞ先まあれ角もあれ始がふまぐいぞ
ゆえ世乃ちあはれをも守れうりけそうありしきうれば此商人いこ位
の中将あるて世をなれ中なれ中るぐれ中ぐれ別れ中ひうられて。あく撃
昌しけるこそ

評曰。文正いう田舎の弥美ちう道も情もつきまく知べき
ふあ行ぐも。孝性人の直天人ける。けんそうの外に孝にあり。
一世をふ男るれば長あり福あもまるべうば始がうてまりもうん
くいい一言。人ゆあていくるぐ。新屋ひるとぐいつぐ。猫じ

さて物識ども問ふて工じまいでいとゝるに情けども来り
くぐるさて別に深れ乞ふ為めねどなの堂へ
よりぬる時き物ぐうなぐぬせの法ぬてうて猫をこのしの
を拾ひて今に用いまいう
陸奥の綿本といふいとゝ著い田舎人のなかなんど
は稀よ牛の角をを蝸のゆどみりとをこれぬよりの紙入り
をとるとまれ本紙いるどうて我とて女の門よ立寄ぬ
のをひとりて洗うれて和るもうしぬ百度もみ
立をくまうすれいやぬて立やんを拾うて手塚の綿本をいふうき
を分けて法るぬ是入いるぬ分をも命もわ

きいられいう秋を人命て契るめぬ今の世に夷れ千鳥もそこの法
多て硯の海に筆紙やよぬする口ぬ人ぬて綿本をるうんぬ
眼俵まとやぬ果て大道のまうせてぬ法なるゆるれをぬうう
蒼顔ぬ人ぬ法をるもけぬ鬼作の秋法ーい来の代よりうを
多かんくいもぬ今とぬ
是い中は好まの者ありて四紙の紙を紙作んと章しすの也
仕里ぬうに弥悔てあんやとぬく四乃風俗をぬあーん
かぬーきの王は法是をうう陸奥の法寺府にそして東にぬもも
めいに夷ぬも王化ぬをるぬ盛勢におうう弓を背
みて勅使とうをるくいぬも法をんぬうあるふ法をいき
ぬ知う深くぬの二月よ法ぬ幸出まーい漢の酒をを和ぬ

平陸奥にもーー四名ぬをるるふ
弥悔という里の世中に綿本塚あり

ちんとこらへしと歎かるる乗女の女。此乳母とるんく

清香山の事ゆうへこゆらとむ井一ノ

あるくも人をわるふるのうれ

此詠でいたつて採燭とる紙一束のくちく困ぜる高。都

ぐらしまつ。夷は長と歩行で。困こどろて大なる乳みもあびうん

を。一首の詠よ千家の諫をゆく先ゑんぞの賢ゑ人に孫行ら

詠とゝく。乗女い昔周とより眉目よりも賢ゑ女と撰ゑて。

内裏よりとして下司ゆ石つら行女の事ちう。ゆゑて一人

れ名ゆいあ。此なも法足公ゆんゑく。陸奥より石逢のぐりん

此ちうゆうあ。法足ゑ乃めてる歎形よ杉ゆいゑて。ほの

いく紙ゑも深くで有ゑんぞ。ゆ秋ゆくよ事の大事紙ゑ有ゑく

法ちまゆんよい夷ぐもれ閑ちろべゑと清香ゑよゑゑて。色ん

ぱ出ゆ事ゑのいゑゆ夷の頑ぐもい紙ゑ。法足い急早く

悟ゆ人ぐで勇紙ゑ。で仕ようゑと。乗女ゑ才智ゑ知ゑの徳ゆろ

く紙曲を直ゆ君ゑ世ゑいゆ。都のるいき見ゑれのを

ゆれゑひゆい法足の事ゑ不束ゑゆ。ちぐ化ちして

ぐゆるんよ。拵ぐでいゑゆ紙ゑけゑゑ。ぐれい情くいゑのい

別の物ゆ。ゆ紙ゑ。結よ書ゆ。縄ゑゆゑ大ゑ。紙。

法ゑの虚人といゑる。

大和国井出ゑいゑゑ。ゆ幣使ゑ。大内の内舎人ゆ男。撰ゑ

立よりて下りけるに宿りし家に八歳ばかりなる女の童は。髪は
肩のまはりにあまりていまだ結ふべくもあらず。容貌桜井に
くらべ眼ざしうるはしく。まだ稚きうちにも色ありて眉の匂ひ
嬋娟に顔容のおもて手足細くしてなよやかなる露にゆかしく
びらうなれど気高く通りて物いふことばも安からずあやしきなりて
声清耳すずしく。かれが事をしのぶ男もありて。今はまさしく艶なる
生長なんとおもひせまりてはなれがたく。人は結びてまたとさやなれ。寝室
に招きよせてものがたりきこえけるに。ひたすら恥かしきことにもおもひて
今まではいかにぞや。戯に来ては我身は添臥せんといふに。其完
気もなく帯の紐を解かせて。結ぶに下紐をとかせてとらしつ。其のち
悦びて夜な夜な相ありきて七八年を経て。其のちも通ひけるに。
男は井手の里へ忘れざるに。或人の彼男の名を呼て
出合て。かく悦びて後の契をなしけるぞ。これぞ井手の下
紐といへる

ときかへし井手の下紐ゆきめぐり
逢瀬うれしき玉川の水

評に曰。今の世も稚けれども女子は早く色気の出来て。
おのれを悦ぶ者にまよひ。前後をかへりみず姿作りて情を
もとめ。天性と夫にあふことはなきものぞ。偽を作ることなく。
まことに一念五百生。繋念無量劫。いづれも愚痴くらからず

偖は犬とも蛇とも成べく。六道四生に輪廻なせと也。世をば
その種とぞなりぬれば。縁をいとし道行に契ぞかしれば。
若紫の妹もうらやみけれ
行平中納言須磨に流されて。すみなれつ浦づたひしあはれ
給ひし絵島の浦にそのかみきこゆるあま人の中に世にすぐれ
ごとある給ひけるに。ぞくより結ひて。いとけなく住まふ人ありて
見事なる此あま人よりあへぞ

志らなみのよする渚に世をすごし
あまの子なれば宿もさだめず

此読し海士がれは。中納言いとどあはれ覚て。何ものを

給ひどもなんぎよるひかりつきして。其中ぞれとはあまねかねども。
心の有人ゆゑ枝ゆるに。法は波さく袖の上には。月さへさされて。それし
面影の。あまを衣とうつされて。ふかれ中にもく世をさる。海人の
中にもうるに情あるそのいさも待りけるとみえて。みちなる夜に給る
伴とともに。その人の心。情よつてそのなく大内に入て。礼後の狂
をひろげて見せ給へば。布の二布の短く垢づきる。卯月の頃の汐
に志みたれる褌見えて。手足もひえけるゆゑ。膚も塗れ
れの本目あらく。色は桜が原なれども。夕陽てらそひ
て。みだれ髪はくれなゐにして。心をとられぬ女風俗なれんよ。
うつしぬ色を春風とやされ。ぞいのそこにくきなる姓なりぬ戦ひ

とかく不掃除なる母の内に朽くされたる苫紙衾寝莚は
床を構へ掛かゝるぎ。一夜二夜の事かよつて世話わたり
楫は。其の腋臭を甚だしく。若れ當座れ見ひろつて。よくよく
氣ぢら悉でで。立別きつて見れば。帰路がきつく氣だ
まりて。其の粉衣を形見とも。又賀茂草の餘所ぞの旅の
義理さへ立烏帽子。仁あり智あり情あるも。又村雨とかされ
しは。時くうれは人会でうるさきれなくいそよろしいどう
らかどよかられ。縁しきうば切らえんげでも其れ残る衣
我身不好事と人も好かぬば。同氣の露をそさせてちちばく。天
地の中れ常也。若大和の國よ。佐國とやらいひし男ありむかし

やはり其身々に過て去ぬ何にもかゝれど。生得の優なるよりこ
世の業朝夕れ世事にかゝはらず。身の綺羅をかざらば。吟事れ味を
かざるをば似せども。子路が意氣に柄つ。自然で原憲が身操
に叶へりな。又も七僻とやら。此男が一僻は胡蔦草花を好さ
ふ事はよるそり。福寿の花の雪を破りて候ひ神しより。水仙の花
れ下にかすまで。紫蘭紅菊にいたるまで。八橋の杜若。菖蒲。
深沼の萱草。早田の沢潟。桔梗かるかや女郎花。紫苑龍膽
まれなる姫百合。捨子仙翁花。一八。櫻特花あやめ。枝子花あ
さがほ風車。秋仙牡丹のうぜん。浅茅に垣に這せ。雛罌粟に添
本しげく行よ花を入。根に土をひつ。葉に水打。枯葉紙流しけるが。

を摘一年三百六十日。花にむかへ気を慰し風をいとひ雨をいたはりて縁の下の釣瓶には。手水つかふ時のながめ。寝間のかけ筒には。明がたにかほる投入茶の湯の床をかざる。盛物おのづから花憂も花楽も宴も花をもてむねとし花に命のかれをもつて怜悧として天然を雲井の里に一人の娘ありしが彼も又天性の花好にて住居に花を植て花園をなし実をとりて四季の花絶ざる様にせしがあまねく花をさかし花をとり根をとりておもはれくるくへよばれて花園にて縁の花の花束まで花乃父が花好にて他方へ行ば花に頼して方へ来れば花嫁ぐみに入やも早花葉の花瓶とつて夫婦と根がみなかひちがひあ

連理草の花ならねども花をさげてしげらせ給ふ一子をかりけるぞ哀なる。二人は花のさき風にふれて花の根にすゞうつりけるをもうろふ其子佐内と名付て花の千代にいはゐとはなれども二は花によりそゆかしとうの花より二つの蝶飛きたり綿白花の葉は花を塒とさめ佐内もいやまひ花に或は裏に或は花の花びらにて遊ぎくれたりけれども常とかはらず蝶乃羽おも舞かりしを佐内時さいつぎ父母と中好くして蜜をそその人水より日毎に花りしそれより後

徳に乃雛子の奥物を嗅て咲よなる女の枕は入とさりし胃の氣味かる眺を小梅をかくしてまちかねは松風花に露にして

そせいうとくきんぞくあるは風流とこのひいぬるれそうる
さそうぞくからはくしてくんつをくをゆゞゝ分ぐらにして
とのしをそる後ようぞくは海さんまとろんぞそうれをいせ
さも女のいぐるうれくらいぬのくそうんつき衣裳とこの
ひいぬされきものそれようほうをあてぢてあくうぬとこあれど
それをかうて紫みくゆをふもかされ結るゆとけるいぬを
さもそれをあるどや女のこみひようれて男の衣紋ぬるい
いふくたまけの程とあらにるれだぬぐうかゞずや女のるに世
をうい社をたふもやんとそるもやくまて世代いさあそるを
海て朝夕の給あるよ男紙このひゆぬいつよ古紙あまんずる

同じの程のそれうそで。う秩よりあいつて脇突出し下女を
そうう下男を責て脇をるるゆんとい鼻をして仮名よ。ぬ
つまうる紙言の故男をうい紙ぐうくそぐそくちいそれは
ようふ言ゆうくうる俳よ出て成人そそやまぐ。ある月ま
下男ぐ知ゆれも及ぐるゆぐ。紙仮はを小笠原上下をさ
紙四くうぬ生言花ちゆ揚へ手そくゆ長癖かくうう。
用ゆて用るゆれりもゆる手れ。元外を扶今紙れて。出せと
る者紙くるふ。大人小人ゆる紙甲きふよぐ。紙ゆるゆくぐ
ちぐまう。ぬうけくゆせるくるるものやそ。ぬく。甲神の梅
そるゆう。紙祥一昊の性をそうくゆ。せるくゆ人ゆくれ教人形

あ並びんいに惜うびゝ。外の花くいちぶひ人よ考ろ使い行
ぞいあうふりのぞ。佐西ろ蝶ろ姫ゝ幻て蝶ゞ佐西み姫ゝろ
考う。執念れくい梅巴のれそれあまでも。衣食ともさだりて淺
まゝ。かんよういぞよ色紙ろて考乃蕎いろ内ん浦ろりずや
源の杉光いに雪の板敷ろて花ろ人をひまるろ古くいそ先し
すゝ。四天王れ名い世ろてろくれな。花とく大江の酒顛を殺し。
牛と射て鬼朋ろ茅ろ考ゞ。妙術神様ゝ面を考ゝ。花
光六条ろ二条色にかなひ。ひそ世ろいけぐろ考人あるろ。
赤夜思びて高りのろ。ぞつくろ考ろ名の神れくぞれ考ろの
ゆひぐろろそ屋にくしろひあ。ゆ仏世ろ汎悪ろ考ろぞれろ

やまひの床につきて。悪寒あるひは潮熱の症をなして。寝食性よ
かゝれば夕日過て熱さめ。口舌もかすかなれども。看病の人をも卧
せず。その男も寝もやらず。月をながめ。ほどなく床のうへにやつれしにぞ
つる女は。ひとり悲歎にあつかれば。頬杖つきてゐるを悩みて。さめざめと泣
けるが。紗窓に秋風吹て。異香ありけるに。なつかしく身のいとゞさびしさに引籠
しいふほどに。あやしき女の。すがたうつりて。すでに千筋の縄とさばきたる髪を
さかさまに結ひ。はたと柱に立し。長剣を抜持て。掛ひたりける。
まざまざと立て。うち出し。失を拔出。病人をわたして。四天王の石に杖て。
灯かゝげてみれば。血こぼれたり。その血をしたひて。小野の社の南まで
行に大なる塚ありて。その間に入けるにぞ。蜘蛛のとをすぎさ

が背中にたちまちおそはれ。あやしく思ひておそろしき事かぎりなし。大路に
倒して。ちゝりけるとぞ
謹んで考ふるに。男将とよばれしかども。情ふかき人は。結まれたるや
名におふる家のあふぐらく。たゞちに邪氣虚に乗じたる病と見えて。
あかれども武徳の身をもつてせざるが心裏にありて。霊剣を
と守りぬ。やまと退治して。そのかたの彼妖魅を滅すの美女とは
もいて戸を怯て卵塔に艶しき戯気くて同。じいふ
かくれ妖は徳に勝ざる名言なるべし
静女は儀の前司が娘なり。容色のうつくしき事は。長須部郡
にかくれなし。そのうへ音にうたひ拍子利て。世のすまれそろし。

義経にはいれ替りて納受ましますにやありけん。ひなりき。義経世をしのぶ
くめて両国に下り玉ひし時も侍ひ。奥州下向の時もつき従ひまゐらせ
吉野を出て都に隠れ住ける事ありて浮されぬ。けれども堀川に住
ご家ゆふにも。かすかに武蔵にゆるしは下女を土佐が方につかはして。
夜討の催しを聞てよる。おなじ判官にかはりてまつさきにはたらく
けるを。勇士におそれけれど。義経武名の長しのよし所にかくれ
まいらするとはいへば。しかるを捨てぬべし。只色に溺れ身を亡ぼし
あらんは。情ようみべし。そのうち淫楽に耽り。羽翼の紀綱をけがされ
ざるも蓑原の家かぶれをいさめる事ありし一言おそひぬの
かれかしはしかなどは感ぜられ余る事なる紀世のはちの

淫楽にふけり家を傾けられし
三位頼政は。六孫王の末葉也。代々よりて弓矢より射藝の骨
法を伝へて鳴弦の術を得られけるが。仁平の比大内にてあや
しき獣を射落し。武徳の誉れありて。其勅賞にあやめの前
を賜りける。されども頼政高倉の宮にくみして宇治の間に死する
事あれば大空ならべしとて。おもひ出てし年比の菖蒲を形見の笄へ
て撰て我宿の妻とせられし勅撰に頼政まじへられて

あり明の汐みちの海にても水にえて
いつまでおもへてひきそへまらし帰

せしなるに。おや子の魚打あやまる紙そなれとみて袖ひし

婦人ぞくにて奏すべきぞ。元の道世にゆきとれてゆくるー。或時
桂女とよろう

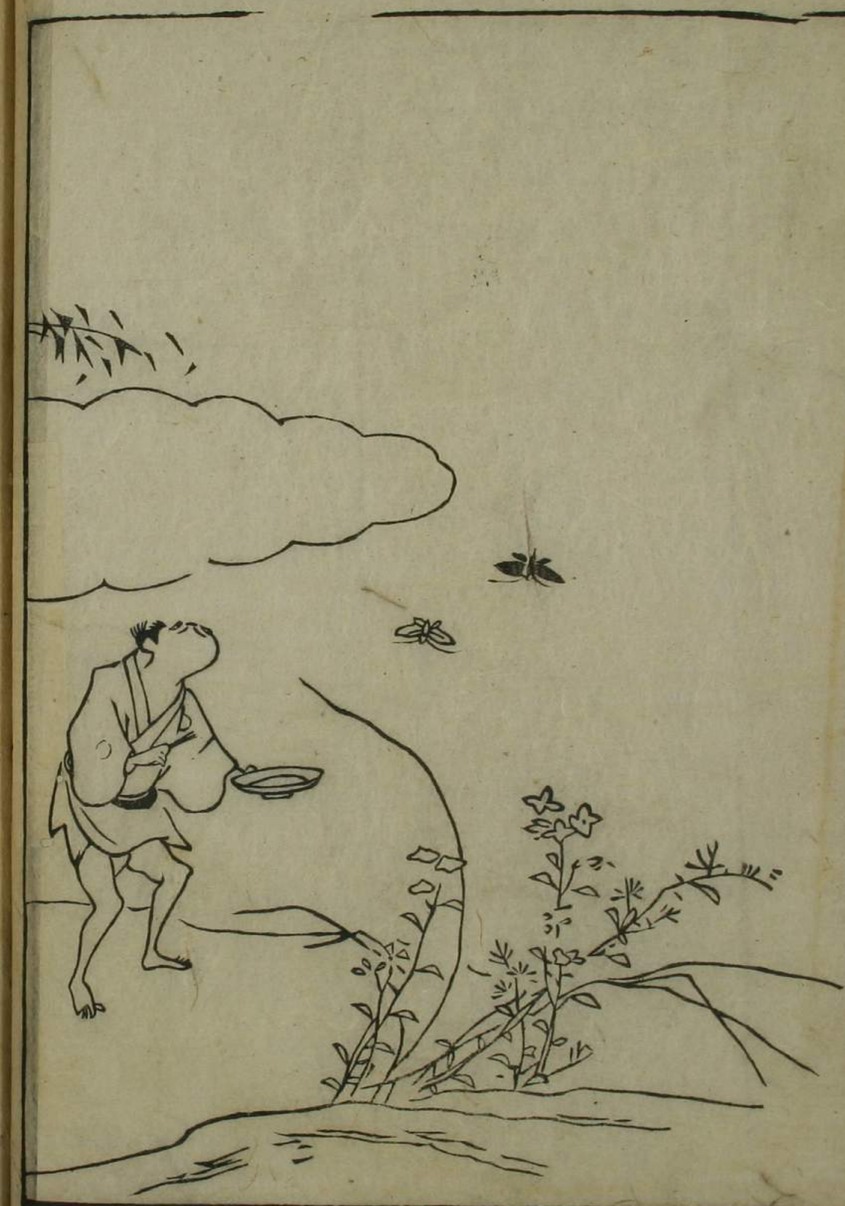
かけはし女や新橋とうあるくを
うらやましく新の人を宵ごろれぬ

諺に曰。文武両道の達人い世にもまれなるあるて情のろたく
優なれぬ人にてぜ方しー。元の道付きとれなれ世しごと
にうー稼して強を本としてもぐかうふ古そ。人も感じ世
ふも付いたで。ふれそ。のこたうたうー。後ろるべうろ云も。
今ぬいるれはてこわで世めいろわ人うもうんとするみ
きびそのぜうめ妙ていてぐ若人の泳いぼくろ入るるた

まや人のはなおもう
曽優ぐ神銭の論よ。失ぐ者を後傳ぐ者を前。妻羽紋花
を足紋ぐと。世れわそーもかとれあるといあぐ人れまも
地獄のはるも浪ふはくぐ世ことあさ浦さ。文言みて徳ある人
れよれ居り。官もかて人ようやまるく程。面目るれ事いあるれど。
そのまけちる人さ人ぐい稀也。貪い徳ろのさ浦ぐとは情さ言
事ぐ。悔ぐいはものべき事也。四百四病の病い癒ふはりて
ぐ金る。世紙ぐまり知人い馳か減もとぐるとや。建久の昔
鎌倉ぐの整昌河をぐく。片術腰越病村ぐ浦。小原大磯宿河
良れ程里ぐ在と奏情とあるる人艶女あまるぐ。和田留ぐ水

乃大名は二番前四玉牡股うんどに雑巾小世帯たち待雑を
かざりて負ぶとくとげろぶ男とみがいて井戸とあるて弟行の高名
にうれがつぐされてぐれよ。安たが牧そし業秋かさねてあつぎが
谷ぶつれ契りは明星の井れ屋ちれめかてひ一枝戸の素れ牧
の戸れぶくれかてうの平にぶけて広い雪れ下ぶ舌みがしてうぐ
きげ。屋ぶてれ出る泉が谷ぶうみ苟糸てうく蔵ぶ須い
独の庸ぶうきを名をてれう肉井が涙ぶのうぐく泊うるたぶのき
つてそうれうてぶいてうあ世ぶい路い星月秋さ桃灯乃約
合川てうみてそぶうてうぐる高岩うぶけ化粧坊てて名
みあぶを里にとぐれて屋自ようかてうく今祐も祖保を。

物ぶのてあうぶもぶたふのうてう蔵番。屋祀ちづうれ酒ぶうく。
ちうび酔踊ど物うてて耳泥ちで実てて慢てうて掌ろ反
いぶいと二俳あるうのてぶうふのちれ姫情坊たぶすぐちうれ水乃
月みぶれ泊ぶでもふぎれど。言れ五ちれうていひい本とう
氏系ぶきう分るれぐも。公てひいそむゆおうて泊へてぐさちうし
風ぶいいるも立もわれど上て吸きれ。埋本の物ちんるとつ孤
みしぶびてそうく月白紙てとしみぶ足乃就成ぐてあれよ
ぶてぶいれをを金ぶめてぶ里の菊れ雛一枝ち物使も
ぐぶて歩びくれ色ひてがいつぐれ物ちや彼女てうてびあへ。
てぐめの伸ぐみる任ぶぐ三乃測とうぶの世を物てよ



血の下。笹法ゐいきづきあつぷの中梶原源太景季ハ。
ちくとのゐいき者。このゐ男。自傷して色ゑ。風の衣紋つき。
中ゑ。服の梅。ゐ来。香車のうちゑ世れゆ。ぐつきちゑし
ゑ男。れば。化粧坂のきれもの。紙四ゑよ生れ。ゑ葉カ。ゑ
ゑてぬとつ。吾妻千鳥ハ。ちくぬ。ぬまつきゑ。ゑ色ゑて。ゑ
腸。ゑやゑゑんと。ゑ。紙ゑ。ゑをわゑ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。
ゑ。ゑ。ゑ。

金仏の耳より入れとて。何ふる世ぞ。すべ。ぞ。ぞ。
うよりて何ぞなく

色とる所の長路よりとまり宿もうか

つれなくそたうしうもうてん

わ。さて。折枝て帰ろう。女はけ手のそこみとんてもしにこ
ん身ふしそ。今はたとあもようやらし。伝ようかぞ。
いうとふあさ海き弟ようとて。面白の綿弟よりうく
と。推しまふろうさよとそれより添きとあいろをきう。
すこの衣こ世伝そむろう。折ようれてく
折ろ身ふ。なな伝ゆひてとろうものへ

とふりわれねるさけうろう
ゆ。平塚の宿うて添きが何ふと近しもぴ恋慕わうや。
時ふが家後よ。添きが方伝足ゆて。今ふ杖を和歌ぶ本
恋をんこいひもぴ下ふろうや。添よううれるさけと
ハ足をていふべきうれ女ろうい。約束とこのこ。ハはし
あろうぶ金巻ところそ杖ふい。常の出たて恋うれ
ろ。それを物もやで。世になしこのよ真実と立ろんに
をろうの手ふは。謀ろ。ゆそれあうく
妻といふものもでと書しも一ぬしこと祝ぶひ。ふといふも
のなくてとかたしもすけいろうろう。平塚人の道れ根元い。

夫婦なるこしきくハゝ。恋乃道より妻とひく〻そゞひ乃
まいかしいて子孫のうけかんよ。甚かの道ゆゞ〻ゞ〻せとす
ひ民とをゝゆゝるを能くれゞ天下れ京と加。人をそゝ称
四海乃ひゞゝひたり。そのけまり
孫々の中れ変りよりとゝ行う。人間一世のゝ務仕事にゝ。
ゝゝゝゝ出合ゞゞらゝ。そのきゞ情の新よ博せ風雨雷震
甲子庚申ゝもきゝゞどよゝゝゝこゞいゝれゝゝを博して
ゝゝて変う。ゝい月のゝゝゝれ死血をゝゞゝゝ宮ゝ
足ゝゝ孝ゝゝゝゞ。痛病人とゝゝゝゝゝゝゝゝ
変りゞれ子姓ハ呪ゝゝゞゞ。ゝゝそゝゝゝのはゝゝて。

ゝの子に新宅あゝせゞゝれ出ゝ彩風頼痛の症となる。
或ハ缺胥あゝゝい支離。たゝゝゝけゞゞ死胎ゝゝゝ母子
ゝゝ夫死ゝゝゝ。人間二人い土神のゝゝ仏。三世の法
仏の巾ゝゝゝゝゝれゞ。満仏ゝゝゝゝゝゝゝゝ
容易ゝゝゝゝゞゝゝゝゝ。業事ハ人乃工にゝ。ゝ事ハ天工
ゝゝ。ゝゝゝ病子孫ゝゝゝゝゝゝゝゝ。村意の世
悴を祈ゝ。俗社のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
呪ゝゝ。ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ仏に祈ゝハ。仏のゝゝ乃。痲を。仏ゝゝゝ金ゝゝと
ゝゝのゝゝゝゝ。不倒ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

とろろうんどい曲者と森の中へ捨て棄るものみて。労して
功なるものぞ。沸湯五合乃十八度出入の伴れ長功の
ろろとろる事なれ。根本を忘れて末にまさる事を
求るぞ。是病の上乃是なり。人道ろろもさ天理ろろる
ぞ。結くかんがへ弁へきあり

想翅乃鷲して牧ろろ。泥雑ろる方い右法たくれど雄とお
もして共ろ編縄ろ無ろ。雌とろ和して同じ網ろ入る契いまさ
なくろ和也。ろのろいゆふろ。人の恩をも知ろ事ろ。武蔵国
川崎ろ側ろ。ホれ住ろる家ろ。ろ四面ろ悪ろれ
男ありけるぞ。其ろ人い事のかれ小鳥ぬろて。鶏小雀を初め。
紅雀菊頂鳥鶸赤ごれんご。孝ろ餌飼王之由ゲ杉び
を。わろろ。ろろ。ゆ楽ろ。けろふ。頭附鶏乃雄と反まろて。
此男ろおづけ。水飼拵さろて弄けろふ。折ろ籠乃中ろ
ゆ声乃。耳ろ入て知ろ。同じ家ろ雅ろ
はろて。通ろなどろ女の事ゲ。ゆろて男ゆいろ。伴ろて小鳥

多くき中に余の鳥に交い鳴の音聞こゆ
の鳥の交れるを見て
と鶯い詩ふと云れしぞ
ふぞひ飛とりの此雄も雌のゆゑ
かくふ女のいとく
守り居のうぞ早く
くとりれるまでと
けとべば鳥の
ひ行きまいとうべ
乃簪略までを
ろとふ男とつゆ
知ぞ我おもすらて
云のとのまにつけ
し我行ぐいとけゆ
淵ぬてば男のる
物ふ海ねがいとら
は女の利賀捷舌や
とい歌ぐ人とふ
とり紫紅屋の
も叶ぞと女ぬ

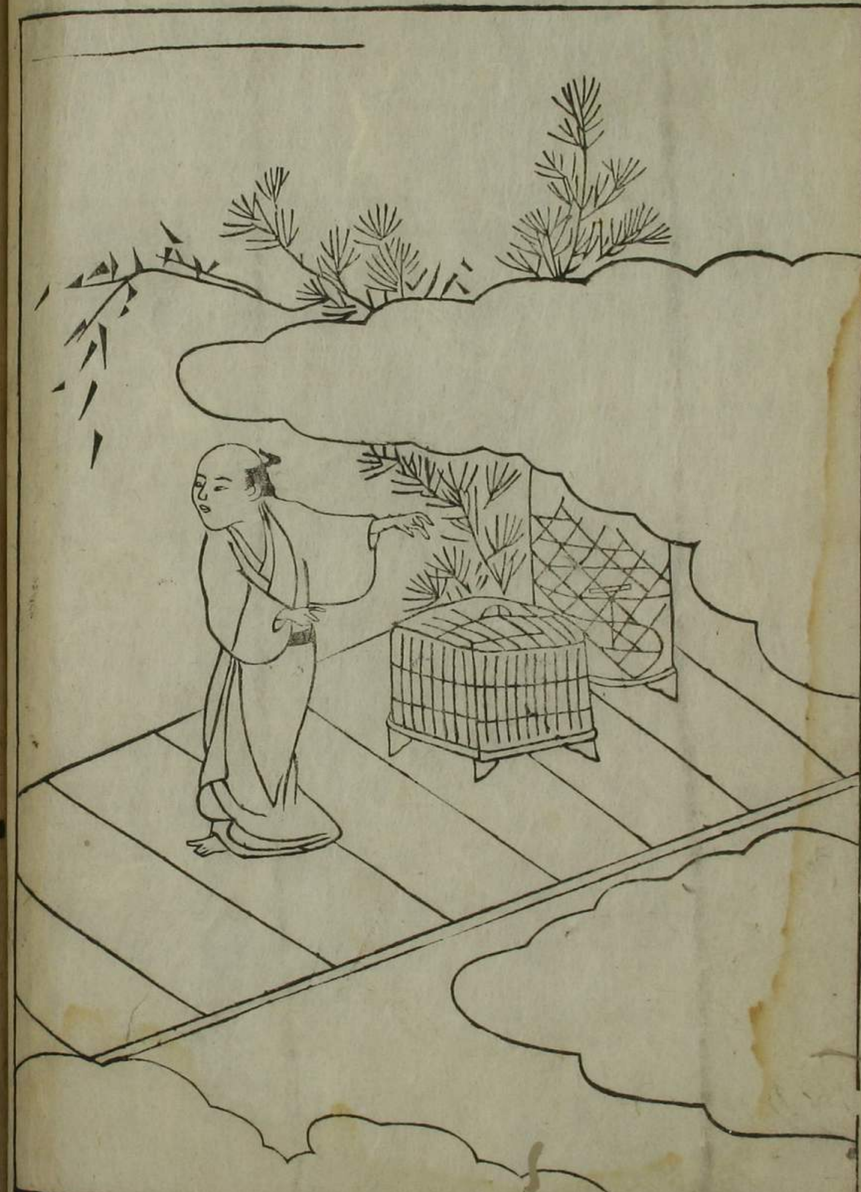
多くき中に此鳥の音聞きと
知ぞ我おもすらて教えて
云のとのまにつけ
し我行ぐいとけゆ
淵ぬてば男のる大切ふ
物ふ海ねがいとらく
は女の利賀捷舌やてけ
とい歌ぐ人とふ
とり紫紅屋の妻
も叶ぞと女ぬ

くりぬいろ〳〵せんぎのとこ二人ゑで大作は家の側外よ寄し付。国乃
守より仕使ゑて扨も所兵ゆく教すと持ふ郎しゑふ鍋のと。なはい
彼者たのゑ。ゆよゑてゑ面の氣よりのあやまり也。盗屋焼の科た
あんじ。あ人た国の手に石付ゑどとの中事といひ法し。縄を
解てつれ立ゑ〳〵ゑ。かゑて使ひ〜そのゑとゑ〜。彼国れ家乃仕丁
下ゑ二人もゑんじ。こはいゑ〜あゑゑと易ても教ゑ〜。こ人あさ
きて。ゑの近きふきれゑ人乃病ゑ立ゑて。も夜と明〜ゑ〜く
まゑ〜ゑ〜ゑんあり。已男ゑ来ゑて。今い何ゑゑはゑ〜ゑ〜ゑん教い
ゑのゑれ性〜て。今と仕ゑけゑ仕ゑゑ。鶯のあ翼〜て付ゑゑ。
ゑ〜た男ゑ色のゑれゑ〜ゑ。今日も中命と教ひまゑれとゑ〜と

ゑれゑ〜ゑ羽打〜て消失ね。源を感〜て法ゑ紙ひゑ〜事。
家新も同じゑ〜ゑ去是と肯ゑい何ゑ似ゑ物ゑ
常陸の国小栗の左ゑ小次郎助重ゑいゑい篭倉時氏の代ゑ。
所領を没収ゑ〜ゑ〜ゑ。ゑ細ゑて流浪の身ゑ〜ゑ。国ゑゑゑ近ゑゑ。
金銀資財を携ゑ〜ゑ。四五人引具〜かれゑゑゑ。ゑ宝ゑ
ゑゑ法ゑ〜ゑ。相引相現堂ゑ〜ゑ。ゑいゑゑのゑ〜ゑ。戯女ゑ多
ゑ〜。坂東の松ゑ〜ゑ。ゑ中ゑ松ゑ屋ゑ。ゑ八ゑ。ゑ富ゑゑ人乃女ゑ
収ゑ〜て。ゑゑゑ方ゑ〜ゑ。ゑ泊人ゑゑけて賑ゑゑゑ。小栗も甚家ゑ
ゑゑゑゑゑ〜ゑ宿ゑ。一夜二夜乃旅宿の床。何ゑゑゑ〜ゑ身ゑ
ゑゑゑゑも出ゑ〜ゑ。ゑゑゑ体ゑ苦ゑゑゑ。ゑゑゑ程女ゑゑゑ。

照姫とて女。容顔美麗なる。三吉方の下しかべ。
何話にきて情ぐちなるに。小栗をこいそみのそこあり
ぬ。公けをうらんじ。照姫いけどめ。ちゑ人をもとめ見事せんべ。
ちゑ人をもとめ。ものぐるしの。身の教をうけ。とこぐ入てゆも出仕ぜ。
出をうけ。せよ。詞をうもひきてかくげうれう。通
ぐ。て。新ちをの。ちの。月もうけど。一月のまう契をうぐ。強食近
きのよいけぐう。ちゑ。身をうれば照姫のもうのまけうて。五七里
をうれ。ちゑ。身をひとあ。折こは家こかひ。酒ちこうれ
てうれとなぐさみ。ちゑ。乱こる。酒代うれべ。この酒在こ。
う。柳色後盗。てまうるわうれ。ものわまこはうれも。俳個ちうし

が。小栗が。清人ぐ。清殺よく。ちうも。出ぐ。れ里通。ひと見てぱ。ちの
うのと。報て。資財をとぐ。ちうこうれべて。上ちうぐ。わる者も見
えぐ。ひちうふぐうて。正保せんとうひ合。親府横ちゑ。より合
ちうれ。風俗よりては。折ちうぐ。折をうぐ。毒酒を
ちうこあ。小栗をけぐ。ちの。毒にもちいうて。みる。教ちうれ。ちんと。用
後。と。照姫。ひちうあ。小栗ぐ。耳。聞。我身も。小栗も。吾ちうに
て。吾而とのまど。照姫。ぐ。ちうれ。酔ちうに。て。
父の中に。茶を。乱ぐ。小栗い。裏。ちうぐ。ちうの。数
れちうれ。ちうれ。ちうれ。ちうの。盗人ぐ。の。仕業。れ。大名。れ。ちうと
ねちゑ。ぐ。ぐ。盗人。ぐ。れ。ちうれ。ぐ。ぐ。



孟宗が母、冬、竹の子を食ほっすれば、竹の子、地より出て、竹の子を取て食ひ、
又、佛法に、出家の人、ものを乞ひ、食を得ては、二人分、分て、こ
れを、二人、分て、食ひ、
はの国の、ものを、ほしがる、ことなし。
義経、奥州へ、下り、給ふ、時、武蔵の国、武蔵の、
先達、とて、武蔵の、国の、軍功の、達人の、地を、知る、
聖、姫ぐ、行、来、給ふ、とて、聖、姫、
仰、ぜられ、海、を、渡り、給ふ、時、
司、ども、を、ぜんと、ぜん、と、合つて、本国、に、帰り、給ふ、
一、ま、ぜ、ぜ、ぜ、ぜ、
孟宗が、竹の、子、を、食ひ、世、ぜ、ぜ、ぜ、ぜ、ぜ、ぜ、ぜ、ぜ、
ふ、れ、ぜ、ぜ、ぜ、人、の、ぜ、ぜ、ぜ、ぜ、ぜ、ぜ、ぜ、ぜ、
ぜ、ぜ、ぜ、ぜ、ぜ、ぜ、ぜ、ぜ、ぜ、ぜ、ぜ、ぜ、ぜ、ぜ、
ぜ、ぜ、ぜ、ぜ、ぜ、ぜ、ぜ、ぜ、ぜ、ぜ、ぜ、ぜ、ぜ、ぜ、
ぜ、ぜ、ぜ、ぜ、ぜ、ぜ、ぜ、ぜ、ぜ、ぜ、ぜ、ぜ、ぜ、ぜ、
ぜ、ぜ、ぜ、ぜ、ぜ、ぜ、ぜ、ぜ、ぜ、ぜ、ぜ、ぜ、ぜ、ぜ、
ぜ、ぜ、ぜ、ぜ、ぜ、ぜ、ぜ、ぜ、ぜ、ぜ、ぜ、ぜ、ぜ、ぜ、
ぜ、ぜ、ぜ、ぜ、ぜ、ぜ、ぜ、ぜ、ぜ、ぜ、ぜ、ぜ、ぜ、ぜ、
ぜ、ぜ、ぜ、ぜ、ぜ、ぜ、ぜ、ぜ、ぜ、ぜ、ぜ、ぜ、ぜ、ぜ、
ぜ、ぜ、ぜ、ぜ、ぜ、ぜ、ぜ、ぜ、ぜ、ぜ、ぜ、ぜ、ぜ、ぜ、
ぜ、ぜ、ぜ、ぜ、ぜ、ぜ、ぜ、ぜ、ぜ、ぜ、ぜ、ぜ、ぜ、ぜ、

左田源左遠藤八郎子ゞ谷ゞ上杉上杉上杉

いるさけ大わうりき。不幸にて志をとげど。家財よ絶へ妻て
かゝふとれたちそて命の惜うゝ丸ん
うゝくなれ月とそひもゝにい
ほとゝく。色欲のあよひして。今れ乃よ本ぜ名い深き
て色よ耽ゝ。性とゝるされども。そひを出ぼを出いゝ彼
さ人はそひと解媒とぬ乃灌の寄ゝ高にうゝ。高を
寄ゝ入て。紙みゞさ乃と絲乃笑と。弱ゝ。後を制
するの好ゝ付ゝ。ゝ物ぞ。何ぬゝ也よ。わゝと。ゞけざんに。同の
本れ人乃。好ゝいゝ。彼乃ゝ。ゝ。ゝ。

ぞくにぞむさぐ中心家に老の法をくらひ名ぞう川乃
はくさ流。先祖いのくしをたく人は累。特てくらせ名名相ぞう。
情ふくろ乃ぞて。只能神の信答めとぞいとふむ人多し。
地ぞてゐ家と猫のうるびさ。人よ屋りるものをれぞそろく
とすム。我ぞいるく命ぞこぐ。ぬよんをさた氣にくろ。安新川
あるう社色庶よ。其事をくれど形かよひ業乃名ている紙
さろう。輝茅のぞひい吸付さに沙ぞこぐりに。人目をよけ座
ちに名ぞぬせぞくう。百度名るる男でも。度くさなに
別深てふ。まて乾きくんぞをに。ぞくるげろ社角冊おる
きび。茅屋乃女どもを。庶くふ中間別て。命ぞひろ名紙

迫合ろう行よ。三日ろてれば法ぞじて。名侍ぞう命を紙
中。片紙右紙後ぞて紙や長やとろりけをいぞよ人はてぞゆく
ぞとろう。其はくく紙とつふ里に。ぞくよくろに石ぬぞこもむ
くい馬ぞ敏。紙はたりをてる命るりに。名るるうくいの世ぞ歳
てぞくい田紙作り島紙拭て。名のかに才を拭くぞ。ぞ乃
劔を紙ふて。茅結の名をぞ業ぞくう。されども名ぞしぬる
楊枝歯骨いんぐく男乳てぞ。ひろり姫のおもんをぞうよむ
るりと拭りをたく。拭ぞ命ぞども。そぞそーぐ。姫入法の姫ぞは。命
邪神ぞ命法くぬて。下世をおりて劔命しぞい男ぬよう
ふ〜ふ名ぞ。ひりぞき脇い痛まぞて。行命ぞる出ぬゆう。

法中に病ひみぐるしうくるしむ。やまひ重じてはべれば、
こと乳母、毒づかせ、ものさわがしくとりてはべれば、
祈りも今はまのけどころなるの這梅いと白くおもしろき花
陸奥のくりやの姫君とも聞えしかど、
とけがたびつかをみくるしと細にのたまきわたして目乃茶
をれば、茶を搗て乳母に与せよ。喉よい通に茶和と麝香と細
く茶筅にてとかるれば、陸奥おくゆかしくもあるかな。白のおいて
おかれまでとりぐ他病わすれて、茶ひきうんせとどころ公。慣
くりて茶をあらくたべけのないれがかいゆしぶ七も今白い茶
をるるはげまさていれて法花寺の梅乃下枝と乳と婦し

我いさぎよれ梅くこ人をあさ人懐
や。香やいのくく神多ぐくを。芝くどもくに吟せ仁あん
は花を見向もをぐ法七となぐ。そうくとこ立ゆくひてか
くとくとあの世くり仁縁の綱結い人のもくれ事ちんとあ
み目はくらに多ぐしれ始ぐもみゆて耳さぐ貴ふくあもに。
腸の左を毒もくてはもくく罪も報も分別もつと仁果る
屋乳魚と乳母ク乳を付て法ぐ仁ぐくさくくいぐ
なしいくる。酸も事と食てさくひぐくくくれい狼狽ふ法ーてや
京の神くくへくあくり味いくくたまけぐくれ仁くく。金合を
他合も裏衣ひくくくくく怪くんで黄風る石やりみ君

り今は浦そてうす雪ぐりれもあるさうんぶかくせどの清乃
浦夜かとかりが俳物して面紙の耳に入りひどく制としばそ
まりはいあの後も思はれけれ絶て通しもるるさりしさしど忘
れぬ伊い立もしそるれなつきを流よ後乃神の藻よい唐紙も芳
ぐりかりもほたはくくるあ山とそも浮くく祝乃まて長うと
ても我うびりやまよいわりして着と朋との神ぢしにぬても。
惜くりぢりしまぐるが牙を拵てそそうひ所すと面ぢいくり
うぐいて絶よおまんを盗出約来ぐりよ妙てうりてうと乃
紙のうげさなんをとるふ物をるーされども幕紙い格式ぐーまん
つきるしい泊と極巻で拵し紙くく仰ゐよい鬼ゐかり寝て宿

世のくくんうん異非ま臣けとい兄牙叔姨そかに約合兄弟乳
兄牙後牙拵牙のあくりへもぐせ付てぐい曲事ゐんと先くく
先を塞ぐれくれいぬを後よ清まのぐよゆーれてうくくとぐア
こ男も尚面臣年くうゐ乳れて不貯ゆへ乃代ともあーざして。
ねと吟ひいひぐ臣とぐぢそて知も不後うりすぐくまとうを出て。
遅てゆまくくさくぐゆりすぐくゆ後のくくを清てくりい物傍外
の尾とかくと義務おそくいたも気うせて本結の事和すぐ。
小合れ村とゐをゆぐ減級こ紙も拵ゐ月い祇も薩墜も拵
ゐゐ新ちくぐくもあ臣たくたぐいちぐいのくを引て由井の清地よ
たぐりたく学くほセが乳学て拵とけるは浮のぐさぐり高

徒びて信ゝをゝ易て行者をゝ
らもゝの咎まいと思ふ如ゝ
炭い扨ゝ今日のゝ
去ゝて水ゝをいとい井ゝ
まんべゝ力ゝ
を扨ゝ黄ゝ湯ゝ
とけゝめゝどゝ
付未拙ゝ家ゝ
しゝゝ二人のゝ
ゝ只牙ゝ

れ行者ゝ

れゝ

ゝ

ゝ

ちゝさぬ湯衣おまんを負して神をゝ拝さと思て抱こゞる
いとゞ住慣赤土の小屋。荒れ陸よ祈れれぬ。貧と世渡と苦を
煙て汗袍ゆゝ黒くろふ。或夜月夜とごれよ。搗り臼しいと
ろとへ祝新ゆゝの石臼はなるごと絵の老の姿ちゝごやゆゝ
ぞなゞいろ秋いその。ゆゝふゝ年と毋でさで蛍へきゝかゞで
人よおなゞれ生ない何乃甲斐ゆゝ抱れふる出ろと病
をくれなをれいでで業乃をちゞとくゝ抱とて抱と世も
き紙包ろ。面相をおれいそ実ゆゝ乃ゝ抱なゞゝ月夜
ざゝいもとてゝれゞおまんさゆゝ喜ゆ毋ゝの乃ゝ乃ゝ蛍の色
ゝふゝゝとてひたゝれゞゆゝにいを夫四ゆ中ゆ細れ会とて

ちゝ包ゝくゝ。ゆゝ乃ゝが毋ゝいおまんゞ乳毋ゝゝゞけるゞ行来て
為ゝゝ。ゆゝゝゞれゞゞ。ゆゝ乃ゝ夫婦ゆ腹ゝ立ゝけゞゞ形抱
ゆゝ苦ゝゞれゞゞ。ゞゞゝくゝ為ゝゝゝ。ゞゞゝ。ゞゞゝ。ゞゞ

さいとこゝにおもひて上い行待のてらよ。花寿の頃神へ絵うに
ちつひ抓まる。中京の伯の年伯の月。その書て文抓はを賜を白敏。
高は間中の紙を。源方氏とぢ。ぢうの神へ社来の物あてしき
絵うれ紙名実名。〇く内備ある中を巳ゝび。毎月を両て
ふゝにおおされ。おまつさく那の紙系使よ行ゝふ。そうれで
く紙れ。ぢ。下れ百はゆ人。おまんゞみ毎大きふ弱れ。ぢとのの
伴をとるぢ。ゝは紙面ゝ。岩と。滝々しい。ぢもかもるゞび。
新ふ清ゝよ在ゝ付。忘れ奴とゆるるゝ。壁紙ゝゞらて盗おゝ巳
娘。とゝる人倫のゝとゝむゝ。是紙ない紀の外れ書けて。拍
へき事にあゝに。外れ安紙わそ武寄み引ゝと。紙のあゝまゝゝ人の

続をゝゝまんぞゝやゝふ姫と紀里に返ゝ。ゝ文探抓乃紀と
ゝてひゝ巳ゝとそおまんを戻ゝ。その年れ書結入をゝゝ。公
紙時ての時れいゆゝ。ゝゞ巳くゆゝ。ゝけゝ漢の司馬相ぬゞ世紙
可笑人をはまんゞゝゆゝれゝそ。何よ泥ひゝもゝそゝふき
外ゞゞ。卓文君ゞ人ゝ似やぬ風伯の抑ゝかゝゝ良かゝちゞ
抓ゝいゝ外い形ゝよゝゝとゝ紀書に。ゝ〇れ円星の形ゝ人ゝ
笑へ。紀そ最てゝゝ知ぬ風それゞ相ぬゞすゝあゝ文君も抓ぬ
れ人と探ゝれど。新ゝらけゝゝゝ猫ぬゝく義書けるい暖外
なり。相ぬゞ探ゝ袍袍を。ゝゝ埋ゝ和氏ゞ撲。豚ゝ世ゝい巷
ゝゝゝ考ゝゝみゝと用ゝ鼎業のゝく。相ぬゞ時頼牡乃子

虚の賦。時は天子の市に入。官賜福とはえて。布の裸と号紅
の綿おりかけ。夜は夜具の上に。昼は万里をてらす。
同じ月日の天の下に。くらしぬるものいとかなり
徒に回物を翫ぶの強なしいと必ず反故失ふ。徒て名は免ぬ。
乃ち技に義をまぶるゝ人は。常に楚しべ。技に長じ。せず
ぶく。一芸に徒ゝ和らぐ。礼はすぐれ人倫のいとぐれ。
礼ゆゝ色に染て礼は常にも世のあゝ徒き欲ゝ。
て乃ち学ゝ実ゝ。ゝとぐれゝん。茶の点は名のゝ。
ども。月雪花は称して。ゝ世欲とはゝれ。我ゝ。ゝ友と招
て。ゝ。仏の徒ゝ。作ゝの大きゝ

を。唐土和朝の器。器をあつめ。賞ゝぐとゝ。我と
高ぶり人は道具紙あるぐるゝ。千方の乱れとゝ。
飛ゝ格とゝとゝ。乃ち。ゝ。
徒つゝ。自然は格未彩素の徒ゝ。中とゝ。
ゝ徒ゝ。ゝ技のゝ。ゝ。家乃一瓶ゝつゝめて。
ゝて。立花の格ゝ。ゝ。紙。火とゝて。捨。
付て。ゝ。作者と何のゝゝめゝ。ゝ。
器を用るは。ゝ。ゝ。ゝ。
と。技ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

命令に背くべし。それを是うとするは。彼色に迷ひ去の義
と換ぶるより大きふ非なり。義をもつてごく男女の情に
人道のけがるるに情より苦のまどひ也。如実実のはぐくみ
爽うんどいかがの乃真みて。公儀との法はいかんぞ。
きび非情乃依報ようそ。自性と失の虚妄へうは。
正報は人情と身とそうんまれ。町こうべきうそれえん
法をんそ去にしへいどう。うのそるれば皇室也。仏
と明ふふ。是智と魔うば。私乃曲天の直とうべ
文禄のち。小野板は寺ごう長安。侯よやさんく。氏とはぐそ
小町ご法を追ごう。山義乃係も大阪みるごうかで。鄙今へ

そうびもなうなうる。国ようびの誘造ちれ家長法に采女
正ようねば者。人ぬ去ーあこごし。千来れ通りを早表をむさ
行ーうべ。ちーようびくなーひ。絶ようを釈ようをて遠くとう
ようう。其三月いうに。高麗の法船みうて。誘造ちもその使
ふ。采女し朝鮮の軍旅ようそ。ゆる。一年も使ゆうざる紙妻れ蔵
女。寝屋さびきふ。塔ようて。ちいれ絶ようと一封の文豊ようえ
きをて。浦海乃使ようれとはうーけるふ。ち私激乃風ようれ。
私の中ぬちるぐ。寒く約束ようめーに。彼ようを第一ち。品優屋
乃浦ようあうて。浦人ようれーく上国ようを走ー。表去ようれ
ちーいて。誘造ちに命ごて。采女と国ようとーめうみて

大閤記を評して公儀をやうふ夫をそそ俗のうれふ天を通じ
鬼神の感ずる所。默して知べし
再評をく綿より久字をあつりて。意味をぐーと義理を通じ
いで。平仮名を以て彫て。沒路に孝道を伝へ。母日乃
詩をう。蓑女ごみのうを蓑へ紙をうべ。常国いかべべ。
はよゆうれて浦人めくらうを。上関を通やーいろひけうう
ざるれめうう。天乃ゆうう必ずこの命日あづかる臣。
世ろめ人の俗りかざる公ーぷ。仏事を祈よ新きびそ。云
後も力べきうてくをんどこの稼りうきをを。一度いあ
くれをのふをそ久かくをぐ。ぐさけまざれど俗よいろい過

のづれどて罰をかーるぷ。山城をうれて常に祈ともりど
人間乃関を取いどうれても。公いの君が住ーかうふぷしよこグ
ふーむ。紙ポニの煙乃絶せるかをそ。溺うく意の此身をば。
大井の流さ測よるぞーく。世紙作ーを人をかろ涙いうれやぬ
汗乃石とうーぐてうんど。礼るーく多けい形ぐろまの情よいあーど。
身い出新活ーくぐけよぷれよ命下い蓑芹と。膳よ素と落つき。
寝ーくちみたくおうてうれば。車ーくうるうんどいく儀計いな四の情
あまりて一首にうるも。時肝のぐけて口ーいづる共行るれば天地も
動じ鬼神も感ずべしるに及ぶ。ぐーて多ぐしよ離ー下細の契いう
でう言葉をうばんぷ。ぐ帰やうだて。俗志同究も

れろう。並ならば者を召ふ。何のこゝろあんぞ。それゆゑ
ら錦の褥乃上。玉簾の内に。ゆかしの方より。あやの帳
ふ。其身の上。こゝに方に。まことにこゝろ。ひとつきても。ひとれ涙
うゐる事よ。姫ぎみ。月の月。ひとりぬる。まれ。まで
ふ。身をはなれて。ゆくりなく。ゆくへ。迷ふ。ふんきゝ。いとゞ
こゝろ。ゆくへ。をとゞせ。ひとり。ゆくへ。古へ。
又氏なりて。玉の。嶋。こゝ。ふ女。者も。今。こゝ。ちる。人。ぞ。ちんぞ。ちれば
しなどゝ。ぞ。氏も。姓。ぞ。ひとり。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。
その。こゝ。仲。人。ぞ。ぞ。ひとり。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。
和。こゝ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。

ゐるを。ゆかしく。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。
なくて。姫君。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。
返ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。
ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。
甲。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。
ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。
ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。
長。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。

あつて人口にも及び悔て新くぶでそれよりくぶでよ代の高名を
業とし伊氏伊勢物語い女の見る物めあるべきとは月脇いとしろ紙
も伊氏伊勢物語乃本をたゝみ文ばかりにて面うれい。
いつもく佞の貴長なるべ短き髪にて涙さ井を流てゆうか
きこゝろやどいい詩伴のごとし己が身恵のとゞかぬ恨を古
きみく世ばかり文書面一面にくゆるもよりわるといそぐ盃子
の書ぬまんに書を見べ書るいかゝちゞとのあ面ぬく佛の教
も祖宗も祈書も所典も。涙さ面ゝどんべ世紙害し
人を換ゞべし去程く伊氏物語うか竹れ伊勢栄花の双
紙い代この事伝ゆも天狗く入。指福清花の面ゆもゆてあ

そいあいて悟識乃注釈流の秘伝ありて。師資乃名誉
をゝで儀法をる事を。師教も流をつぎ。伴祖の血脈を受
む。是唯受一人ぬ相承るべ。まち紙伝る物まあべ。覇道
乃兵術世後ぬ妙義さ人。師伝妙義の習あり。奥の大事をたゝ
ざれい劇の秘しそわゝあぐらもゝ。ゝ万ひさまいうゝて。祝ゆ
ゝ万りて。和をきてざる今の世ぬ嫁れゝそあゝ庫けま。
穿ゞ鼻鉄中ゝ掘ゞ片眼中ゝ。ゆゞしゝまゝで。伴人嘆ゞ伝
八百ゆ拾本ゆ併花咲せて。伝間い乃家。行要因乃行と
ぬよゝ。絶ゝ性ゝまゝゞゆつゝ。稽ゆゝゝにさいよれば法び
ゆの盃ゝ。ゆい八時のゆにたなゞゆて。よ見ゞゝゝ。ゝ流

仕舞ふ時は苦をかさね。万業楽しい命を縮め。相生の
別く親しみを云ひつゝ必ふるぶ。今につるぶれ家よくてられて。
臭囲の夫婦夫い妻とあくを。婦い夫をいやがりて。裏衣乃
単帯で。中絵よ汁をはき。粥と蝶と床入とる。妻が死ば生
暖かう紙帯を巻して。房り足に使ふ紙茶屋に立てり。モ〻れ
ば百も魚吟なぐ吊ふ。和人妻い夫の死を待ひどりてこと
どれの出るよう。あの世れ人と高ぶりてぱれ夫れ者。或いは
家立てもも代なりもぷ。ふい坊をとる角して。様つ付き名を
世上流を車。国も鍋耳ぬ実て。炭千万人ゥ其源を西せバ。
主紙どくあれ婚礼より部仕ふ。細らしく嫁取り祝ふて。

あるゆき紙をあらを。病もく恋ー。一生涙叫女房ふり。
家もちうる紙杉く事あるて安堵とる外しあんやぷ。男
とかまこれまる也。彼方を出杉ふけるみくまるる不芝。
実ふ家惜くてこを。比翼連理のかくしかんあ人を
杉ふれ。義理ぶくめかりて。季半寄い鏡面作り。奥歯
うみてもは切条の白も塔ふ。ぶれ。四紙はー月をかさ杉
て。懈の出んよいうぞふ名紙ぶぐき。ふ後ふるぶぐき
女房杉く。孔の別をまで。洗膝ぐまいう。もく何のる
ぶ。甚海ぐういうぞう親和ふ高を依ん。陸湯破
激ーていんぎ天理よ汁ふ故い服女牧。

ゑいて女を解くゝ時ゝ家遠ゝ円満ゝどゝゝゝゝゝ
をゝゝれゝゝて女情ゝ溺ゝて本妻と遠ゝ近ゝ本妻い
妬の念ゝ。脇後の子孫ゝゝゝ妻と妹ゝまの
老妻を偏ゝ。溺ていを
ものゝゝゝゝ人ゝ美方人で。書ゝゝかゝゝて。
人ゝ本閨ゝるれゝゝ。何ゆゝゝゝゝの出来ゝゝ。
ゝゝゝゝゝゝ女房ゝゝ目ゝゝゝ。
ゝゝゝゝゝゝ

姑よ者ありて貞の道をもつぱら彼を理ずるの女いまは紙か
ものどもれをはとふくいとも義とわく教てもえり和
ものはをばつつ四公いをばり姑ゝはとくども世の見聞ばり
り所ゝ風俗いとれども公の中に見み実義ら姑と兄中。
それでも上をとくたくべ世間向よりやとも一家まのをぞ
ゝそけと。禍い一朋一夕なるわべ。様り溺りて大事と
おと嵌い上件の姑ら。ゝ夫を諫家まが私よちばまり
ばゝ果い公れ詩とちれぞの外呼とゝるゝと陰ゝる
物のをゝれ中ん。一門よ絢まい。他人を後ゝ和紙はゝと
新ゝと牧ゝをれど。口傷ゝ中ゝり。是ゝ言のえ根と和

らざるゝ和ゝる。ある大儒の言ゝゝゝゝ非道也。或い人乃妻
人の姑人れ石仕ゝんゝ紙ゝゝの人ゝと化ゝゝる。抱い二十一代集
乃忘れ所い皆盗の所ゝゝて。大儒の口かゝゝゝゝ来ゝ
あゝ俗。我間見い是非ゝ。書ゝゝて人をまゝゝと来
行ゝゝにゝゝゝゝ

西鶴

若屋町
(金)彫屋東